

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1899号 2007年11月19日(月)

《 volatile week ahead 》

現在欧州出張中ですので、今週は予定を中心に送ります。週としても、アメリカは感謝祭の連休（実質的な）に入りますし、日本でも金曜日に祝日がある。ということで、今週は動きがあるとしても一週間の前半に固まるでしょう。

先週号で予測したように、先週の市場は非常に不安定でした。その不安定さは、FRBが先週末15日に行った5兆2000億円もの資金供給オペが雄弁に物語る。このFRBによる市場への資金供給は、2001年9月11日の同時テロ以来の規模である。操作は従来通り傘下のニューヨーク連銀を通じて3回に分けて行われ、総額は472億5000万ドル。金融における不安が本格化した8月9日以降では最大の規模である。FRBによると資金供給の中味は、14日物で80億ドル、6日物で200億ドル、翌日物で192億5000万ドル。15日の総額は今月1日の410億ドルを上回り、金融不安発生後の最大を記録した。米銀、米証券の相次ぐ評価損拡大発表や、それに伴いトップ交代の続発で、「次は何処」の疑心暗記が市場を覆っている様子が伺える。

もっとも、不安心理は続いているが、相場の動きを少し冷静に見ると、全体的には「不安慣れ」「損失拡大発表慣れ」の印象がある。相変わらず不安定ではあるが、例えばドルは対欧州では一応下げ止まったようにも見える。チャートを見ると、1.47ドルの手前ぐらいでユーロの上げ足は鈍っている。しかし、ドルにはっきりとした反発の兆しもない。また金利差故に相場の動きが少しでも止まると円キャリーの動き復活の兆しも見えるが、しかしその度にドルの大幅な下げ現象が起きており、ドルは対円ではまだ脆弱だと言える。

一方、株式市場の動きも不安定だ。世界的に各国の金融機関（銀行や証券会社など）で発表が相次いでいる評価損拡大発表の今後の展開が不透明で、これが銀行の融資抑制を惹起し、来年にかけての世界的な景気後退が発生するとの懸念があること、原油価格が騰勢を失っていないこと、中国やインドでの利上げの動きなど、懸念材料が多い。指標から見れば割安感が出てきている中でも、先行き株価の頭が抑えられそうな展開が予想される。警戒は怠らない方が良い市場が続くだろう。もっともボラティリティは高く、あえてリスクを取る人には面白いマーケットかもしれない。

今週の主な予定は以下の通り。

11月19日(月)

米11月NAHB住宅市場指数

11月20日(火)	10月全国百貨店売上高 10月コンビニエンスストア売上高 米10月住宅着工件数 米10月建設許可件数
11月21日(水)	10月貿易収支 9月全産業活動指数 米MBA住宅ローン申請指数 米FOMC議事録(10月開催分) 米10月景気先行指標総合指数 米11月ミシガン大学消費者信頼感指数(確報)
11月22日(木)	米債券市場短縮取引 米国市場休場(感謝祭)
11月23日(金)	東京市場休場 米債券市場短縮取引
11月24日(土)	豪州総選挙

大きな指標の発表はない。個人的には中国の動きに注目している。株式市場もそうだが、インフレ率が相当高い水準になってきており、特に豚肉や野菜などの上昇率が高い。これは、中国民衆の生活を直撃する。

温家宝首相が先週は北京の貧困家庭を訪れて、「物価抑制」を約束したと言うが、どう実施するのだろうか。一方で中国の中央銀行の引き締め操作を続けている。これはいつか上海の株価に打撃になるはずだ。今は世界の市場はサブプライムローン関連証券問題で揺れているが、これに上海の株価の下げが加わったら、ちょっとややこしいことになる。

《 have a nice week 》

欧州に来るとユーロ高が本当に実感される。90円以下で1ユーロを買えた時期を知っているだけに、一時は170円近くまで行ったユーロを見ると、ある意味腹が立つ。自分の国の通貨がこんなに弱くなって良いのか、と。それでも成田からフランクフルト行きの飛行機には、たくさんの日本の若い女性が乗っていました。きっとドイツを含め欧州観光に向かうのでしょうね。

この文章を書いている時点ではベルリンに居ます。ベルリンに前回来たのは2001年の年末から2002年の年始にかけてです。その時はソニー・ドイツに勤めていた杉岡さんに、ポツダムとかシュベリーンに連れて行ってもらった。彼は今モスクワをへて、今は日本の証券会社に勤めている。最初のユーロ紙幣が2002年の年始に出たのです。夜中にタクシーでシティバンクのATMでユーロ紙幣をゲットしたことを今でも覚えている。そ

の紙幣は今でも持っています。

その前は確か1990年、ベルリンの壁が落ちて直ぐでした。壁が残っていて、今も市場部門にいる小林君とブランデンブルク門の周辺を歩いた記憶がある。その時のシュペリーンは惨めなものでした。今でも鮮明に思い出す。それが2002年には綺麗に西側化されていて、90年に歩いたシャビーな東ドイツ側のベルリンがブランド街になっていて非常に驚いた記憶がある。そのブランド街とは、フリードリッヒ通りです。この通りはウィンストン・グランデの辺りを伸びている。

車の中やレストランで、運転手さんとか取材相手のドイツ人と話しをしていると、1989年の末まで分断されていたこの街の歴史が、この地域に住むドイツ人一人一人の履歴、経歴や人生に落としている大きな陰、実に大きな影響力にしばし愕然とする。運転手さんは物静かな芸術家タイプなのですが、話しを聞くと壁が落ちるわずか3ヶ月前に1才の子供と奥さんを連れてリスクを承知で東ドイツから西ドイツに逃れた経験を持つというのです。勇気が必要だったと思う。

しかし、その3ヶ月後にベルリンの壁には若者がよじ登って、あっけなく、そして皆が「いったい何が起きたんだ」と言っているうちに壁も、そして東ドイツも崩壊し、時間を置かずにドイツは統一された。「自分がリスクを犯したわずか3ヶ月後に壁が崩壊してどう思ったか」と聞いたら、「こんちくしょうと思った」と正直に語ってくれた。

今日一番取材に長い時間を使ったあるNGOの事務局長は、奥さんが旧東ドイツの出身。ポーランドを旅行中に奥さんと知り合い好きになったが、結婚する決意をしたものの、東ドイツの奥さんが西ドイツの彼とすんなり結婚できるわけもない。1年以上も西と東の政府を巻き込んで交渉した結果、彼は奥さんと正式なルート（といっても西と東のバーターのような交渉結果）で結婚したという。彼は当時フランスで働いていたのですが、壁が崩壊したと職場の友人から聞いたときには、「冗談だろう」と思い、本当に壁が崩壊したと確信したのは翌朝に新聞を読んだ時だったという。

ベルリンで生きている多くのドイツ人一人一人に、「あの時代」「あの時」に関する思い出があるんでしょうね。「壁」が落ちても、1990年の西ベルリンと東ベルリンはまるで別の国（一方は先進国、一方は貧しい貧困国）だったので、雇用の問題、西の人の東に対する偏見など、ドイツ人には「心の壁(wall in the head)」が残っているとずっと言われた。

私は東ドイツ出身のメルケルが首相になったとき、「これでドイツ人の心の中に残ったもう一つの、そして最後の壁もなくなったのかな」と日本に居て思ったものです。あるテレビ番組の最後の言葉に「心の壁崩壊か」を使ったこともある。しかし壁崩壊のわずか3ヶ月前に西ドイツに亡命した運転手さんのこの問題に関する意見は、「確かにメルケルも、もう一人の野党の代表も東出身で、そういう意味では大きな前進だ。しかしだからと言って、ドイツ人の気持ちの中に刻まれた心の壁がなくなったかといえば、そうは言えない」ということでした。

今週末までドイツに居ます。それでは皆さんには良い一週間を。

《当「ニュース」は住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》